



世界遺産であるルアンパバーンはラオスの古都で（現在の首都はビエンチャン）、1353年から約200年にわたり、ラオスの前身となったラーンサーン王国の王都として栄えました。山々に囲まれ、人の手が入りづらかったことから現在も街にはラーンサーン王国やフランス植民地時代の面影が色濃く残っています。そのルアンパバーンを象徴するのが、ラオスのすべての寺院のなかで最高級の美しさを誇るといわれるワット・シェーンです。本堂は「ルアンパバーン様式」とよばれる大胆に湾曲した屋根が特徴で、背面には仏教に関する物語が表現されたモザイク画「マイ・トーン（黄金の木）」が掲げられています。



世界の地域から

## ルアンパバーン（ラオス）



托鉢

仏教国であるラオスでは男性は一生に一度は必ず出家して僧となる習慣があり、国内全土で僧侶が喜捨を求めて町を練り歩く托鉢が行われています。出家期間は個々の事情により異なりますが、その多くは少年期に行われるため、托鉢を行う僧の過半数は少年僧です。信者は僧へお布施として、主にもち米やお菓子などを渡しますが、このお布施はそれぞれのご先祖様へ届けられるともいわれています。早朝のラオスで見ることのできる鮮やかなオレンジ色の袈裟を身にまとった托鉢僧の行列は、ラオスを代表する風景の1つとなっています。